

健康な絵具。



発色が鮮やかなだけでは、よい油絵具とはいえません。粘度や固着力、耐光性など、絵具に求められる性能が一つでも欠けてしまうと、油絵具としての生命は失われてしまいます。ホルベインは6工程の顔料テストと4工程の製品テストを行い、油絵具になる前もなった後も、私たちの品質水準に達しているか厳しく審査します。健康な人が艶々して見えるように、絵具もバランスがとれているほど発色が生きてきます。ホルベインの命は品質です。

●20号チューブ(110 ml)、全40色で新登場。大きいサイズだけど、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都品川区東横田2-10-4 TEL.03(3942)9151 大阪府東大阪市上小島1-3-20 TEL.06(6722)1314



holbein

ホルベイン絵具

www.holbein-works.co.jp

holbein

湯浅龍平

鷹見明彦「文 高嶋清俊」写真「ニエウジ」

VOID — あいだに在る空間



1992年、スコウヒーガン美術学校のサマースクールにて。学生と招待作家がひと夏をともに過ごすレジデンスは、ジョン・ヴァルデッサリやロス・ブレックナーと身近に接する機会だった



1988

「スーパースターだった
バスキアに憧れて
絵で成功したいと
思っていました。
一日一枚描き上げる
つもりで、描きつけました」

A PICKLED HEAD 1988
紙(スケッチブック)にグワッシュほか
21×30cm

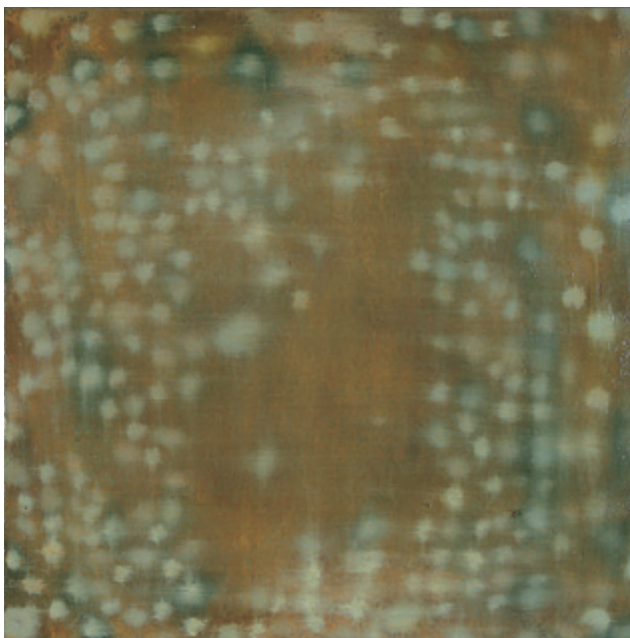
将来、画家になる少年は、現代音楽の最前線で活躍する作曲家の父にともなわれて、子どものころからハワイやサンフランシスコ、ベルリンなど海外と日本を往還しながら育った。高校までは理数系で、天文学や建築に関心があった。一九八二年、十八歳からは、カリフォルニアのサンディエゴに移り住んだ。

「UCSD(カリフォルニア大学サンディエゴ校)で父が教えるようになって、東京からついて行っただのは、サーフィンができるとおもったからでした」。編入した高校の美術の授業で、つけて最優秀賞をとったのが、アートの道へ進む原動力になった。美術のクラスでは、絵具セプトが支給されて陶芸の工房もあった。サンディエゴ州立大学の美術科に進学。《A PICKLED HEAD》(一九八八)は、毎日描きためていたドローイング帳から一枚。

「そのころ(八〇年代後半)は、バスキアやシュナーベル、サレなどのニューヨーク・ペインティングが全盛期で、かれ

1992

『VOID』は、
ものとのものとの間にしか
存在しない空間です。
過去と未来のあいだに
ひろがる現在のよう」



VOID 10 1992
キャンバスに油彩 45×45cm

らはスーパースターでした。絵で成功したいと本気で思いました。だから一日一枚描き上げるくらい頑張つて六年間のコースのおわりには、スタジオが買えるようになりました」。

卒業後の夏休みに奨学金を得て、メイン州のスワヒガン美術学校のサマースクールに参加した。六十名の学生がひとりずつスタジオをもらえて、アートシーンで活躍する招待作家の講評が受けられた。

「招待作家には、ロス・ブレックナーやジョン・ヴァルデッサリ、フィリップ・ターフなどがいました」。ゲイのとりまきを従えてスタジオに等身大の鏡をおき、いつも身なりを気にしていたブレックナーには辟易（へきえき）したが、ヴァルデッサリからは、「絵画も、作品を観ることもコンセプトチュアルなんだ」といった有益なアドバイスが受けられた。

それからCAL ARTS カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アーツで学んだが、この有名なアートスクールは、制作よりもクリティカル・ス

タディーが主流で、論理や哲学、記号論などのクラスが盛んだつた。「批評会では、なにが作品を成り立たせているか、質問攻めに遭うんです。自分の考えの無駄な部分がそぎ落とされていくっぽうで、たとえ間違っていると感じていても、適切なことばで自分の作品を説明できることが重視されていました」。

「絵画など、もうふるい」という空氣のなかで、絵を描きつづけた。油絵具をラッカー・シンナーで溶いて石膏の粉を混ぜ、固まらせて剥がしたり、染みの跡をなぞったりした。

「古いプレスコ画のようですが、観えないものの内に観えるものを見出したい」という気持ちがあつて」。

『VOID 10』（一九九二）は、日本での初個展に出品したうちの一作。一面一色で塗りつづがした色面を乾かして、サンダー（やすり）で表面を削つては塗り重ねて層をつくる。手跡を消した地に筆で点をおき、暈ぼかして背景の層に融けこませた。

『VOID』は、ぶつつ無とか虚空



2003 「バック・グラウンドとフォア・グラウンドの間に欠けていた ミドル・グラウンドをさがして、線描を試みました」

INMORTAL 2003

キャンバスにアクリル絵具、アルキド樹脂、エナメル樹脂、油性ペン、油彩 90×80cm

間のことですが、僕にとってはそれ自体で表せない、存在するものとのとの間にしか存在しない空間です。過去と未来の間に漠然とひろがる現在のように、秩序や時間性をもたない拡がりなんです。

銀座のギャラリーでのデビュー展には、子どものころから知っている父の友人の現代詩人や画家、作曲家も大勢来てくれて、出品作も大半が売れた。同時にアメリカのギャラリーとも契約でき、しばらくは制作だけで暮らしていけるスタートをきることができた。だが、アメリカのアート界には、メジャー・リーグやプロ・バスケットに見られるような厚い壁があり、契約から個展までのハードルも高い。「ブレックナーに類似した作品で、山の頂上に旗を立てた作家がいる以上、同じ山に登ろうとするかぎり展覧会はできない」といわれたことも。

近年までサンディエゴのオーシャン・サイドにあったスタジオの近隣には、サーフボードやウェット・スーツの工房があった。そこで、VOID



ゆあさ・りゅうへい (RYUHEI REX YUASA)

1964年東京生まれ。90年サンディエゴ州立大学美術科卒業。スコウヒーガン美術学校に学ぶ。91年カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アーツ修士課程修了。おもな個展に92、95年ギャラリー上田デコール(東京)、96、2000年クリストファー・グリムズ・ギャラリー(サンタモニカ [アメリカ])、98、99、00、02年ミモコ チバ アソシエイツ(東京)、01年シェリー・リディ・コンテンツボラリー・アート(カンザス・シティ [アメリカ])、02、03年ギャラリー風(大阪)など。おもなグループ展には95年「VOCA展 95」(上野の森美術館 [東京])、「モルフォロギア」(アキライケダ・ギャラリー田浦 横須賀)、95、97年「ART TODAY」(セゾン現代美術館 軽井沢)、97年「ワークス オン ペーパー」(テキサス大学 [アメリカ])、98年「昭和シェル石油現代美術賞」展(目黒区美術館 [東京])、01年「現代のイメージ 絵画の現在進行形」展(熊本県立美術館分館)、「網膜の絵画の快感」(中村一美・湯浅龍平)展(海岸通ギャラリー・CASO、ギャラリー風 [大阪])など。

大阪、ギャラリー風の新作展会場にて。カリフォルニアに住んで20年以上になるが、ここ5年は、毎年個展や展覧会で帰国している。背景の作品は『BOCEANIC』(2003)

を育む制作はつづいた。ある時期から量した点は、ハイライトをつけた円球に変化した。『VOID』以前は、削ったり剥がしたり手技としての絵画を消す方向でしたが、絵画の特質である二次元のイリュージョンとその空間性を引きだそうと、背景と前景の差をひろげる作業を進めました。

《INMORTAL》(2003)は、アクリルの色面を削った地に光沢をだすアルキド樹脂を塗る作業を重ねた部分と、黒のエナメル地にシルバー

の油性ペンで線描した部分を合わせている。油彩の部分は、マスキングで型どりの形に絵具をのせてペーパーで押さえ、剥がしてマチーニルを作る。新作では、蛍光色が多く使われている。「色点や円球のVOID」から線が変わったのは、いままでのスタイルが完成したので、ちがう方向から同じことにトライしてみようと思ったのと、背景と前景の間のミドルグラウンドを線で表そうとしたからです。

「この線は、電話で話すときなどに、ぐるぐるとメモ用紙に描いたりするような無意識から出てくる線です。」

艶のある黒地への線描には、去年京都や奈良で見た時絵や写経からの影響もあるという。制作時によく聴いているテクノやプログレッシブ・トランスによるレイヴ・パーティーのポスターの図柄とも共鳴するという辺りに、画家の持ち味が覗いている。(十二月八日 大阪・北浜のギャラリー風にて取材)